

# カトリック八尾教会ニュース



“主は復活された、アレルヤ!アレルヤ!”

2026年4月

## 【今月の予定】

## ミサの時間

## Tháng tư

せい 聖	2日(木) せいもくようび 聖木曜日	19:30	しゅ ばんさん (主の晩餐)		
しゅう 週	3日(金) せいきんようび 聖金曜日	19:30	しゅ じゅなん (主の受難)	だいさい しょうさい <大斎, 小斎>	せいち けんきん 聖地のための献金
かん 間	4日(土) せいどようび 聖土曜日	19:00	ふっかつつやさい (復活徹夜祭)	せんれいしき 洗礼式	
	5日(日) ふっかつ しゅじつ 復活の主日	10:00	はつせいたいしき 初聖体式	(*7時のミサはありません。)	

└※ミサ後、祝賀及び送別会があります。

12日(日) ふっかつせつだい しゅじつ 復活節第2主日 7:00

└(神のいつくしみの主日) 10:00

19日(日) ふっかつせつだい しゅじつ 復活節第3主日 7:00

10:00

ベトナム語のミサ 15:00

26日(日) ふっかつせつだい しゅじつ 復活節第4主日 7:00

└世界召命祈願の日 10:00 子どもと共にささげるミサ/小教区評議会(ミサ後)



びょうしゃ いの つど 病者のための祈りの集い

平日のミサ [木曜日] 10:00 16日、23日(2日、9日、30日はお休み)

## からし種 (テーマ): 『過越の聖なる三日間』



キリストは人間にあがないをもたらし、神に完全な栄光を帰するわざを、とりわけその過越の神秘によって成就され、ご自分の死をもってわたしたちの死を打ち砕き、復活をもってわたしたちにいのちをお与えになった。このため、主の受難と復活からなる「過越の聖なる三日間」は、全典礼暦年の頂点として輝きを放っている。したがって、一週間の中で主日が占めている最高位を、復活の祭日は典礼暦年の中で占めている。

(第2 バチカン公会議『典礼憲章』より)

## 四旬節黙想会がありました!

3月1日(日) 9時~

<ピーター・トアイ神父様講話より>

・・・カトリック信仰は本当に、感覚に訴える美しさを持ち、存在そのものをいやし、そして理性にもかなうというものです。だからこそ、私は自分の入門講座に「美・善・真を求めて」という名前をつけました。「美・善・真」は単に神へと至る道であるだけでなく、神ご自身の「道」そのものだと思っているからです。

美の道: 多くの方は、まず信仰の美しさに出会うことで教会に近づきます。聖なる芸術、音楽、建築、惜しみない愛のわざ、荘厳な典礼、あるいは信仰深い友人の輝くような生き方や彼氏彼女の

仲の良い姿で、その美しさを感ずるのです。例えば、ルネサンスやバロックの傑作に心を動かされた方も多いでしょう。昨年カラヴァッジオの《キリストの埋葬》の大阪万博での展示には、数百万人が訪れました。実のところ、キリスト教の二千年のあいだに、数えきれないほど多くの人が、このような聖なる美によって心を全能の神へと高めてきたのです。

善の道：聖なる美は感覚を喜ばせるだけでなく、心をいやし、人生を変えていきます。美はつねに望ましいものであり、それゆえに真に「善い」ものです。より高い善をしっかりと求めた聖トマス・アクィナスのような人々は、感覚的に経験される善と出会うときに「すべての善の源」である神のもとに立ち返っていくこととなります。その具体的な例として、岡山聖虚画家(1895-1977)が挙げられます。彼は、自分より三世紀前に殉教した日本二十六聖人の証しから想を得て、神の崇高な善に出会えました。15年にわたり聖人たちの徳を学び、絹絵を描きかける中で、主の最高の善が分かり、1930年に洗礼を受け、アッシジの聖フランシスコを保護の聖人として選んだのです。

真の道：聖なる典礼、芸術、音楽、そして心からの愛のわざなど、真正な信仰から生まれる多くの美しく壮大なわざはやはり、「神の真理」を指し示します。目に見えるものも見えないものもすべてを創造された創造主である神は、すべての善と美の源なのです。はじめに宇宙を創造されたとき、神がすべてのものを見て、よしとされました。被造物の美しさや善さを心から楽しみ、その中にある真理を求められる人は最高の真理そのものである神に近づいているのです。「真理を求め信仰」は科学や現代の豊かさをすべてもたらしてくださると思います。最近亡くなられた国際的に著名な物理学者、アントニオ・ツイキキは、こう語っています。「科学とは、人間が事実をもって、自然が精密な設計に従って書かれた一冊の書物であることを示すために持っている唯一の道具である」と。この設計は、より高い知性、すなわち神の真理を指し示しています。

「神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊を授けてください」(詩編51)。

多くの求道者が神の「美・善・真」を愛するようになり、この世のさまざまな魅力を手放して、より清い心で神に引き寄せられますように。カトリック信者の私たちは、彼らに対して自分たちの希望について弁明できるよう用意ができていますでしょうか。それとも、知らず知らずのうちに信仰がぬるくなってしまっていないでしょうか。この四旬節の歩みの中で、少し立ち止まって、自分に問いかけてみましょう。私たちの人生で、本当に心を引きつけているものは何にか。求道者の皆さんとともに歩みながら、カトリック教会の中に見事に表されている神の「美・善・真」の豊かさをあらためて見つめ直してみましょう。そして、いつの日か私たち自身の生き方でまた、神の「美しさ、善さ、真理の光」をほんの少しでも光り輝くものとなりますように・・・。

### <黙想会に参加して>

今年の四旬節に、ピーター・トアイ神父様を迎えて行われた黙想会では、カトリックの「美・善・真」を通して神様に立ち返り、私たちが神様との関わりの中にあると気づき、また、人間の思想・学問・芸術・社会制度等に広く、カトリックの「美・善・真」が影響を与えてきたことを知り、自分の信仰を見つめ直す大切な時間となりました。

ミサ後、多くのベトナム人信徒が言葉のハンディキャップがありながらも、翻訳機械の力も借りつつ、「ゆるしの秘跡」を受けることができたのは、神父様方のおかげです。お二人の神父様に感謝いたします。私にとって、恵みに満ちた黙想会となりました。(ベトナム人信徒B.D.)

## ■釜ヶ崎炊き出し支援日誌(社会活動委員会)EとKより……3

きょう おおぜい 今日も大勢のボランティアがお手伝いに訪れています。エマニュエル君。2メートルの巨体が  
ちからづよ うご 力強く動いてくれています。ミッションスクールの生徒たちも助かります。ある日、釜の火おこ  
しを ころ 試みました。3カ所の灯種を起こすのは大変な作業です。今日はいつも火おこしをしてくれ  
る方が遅くなりましたので、取りくんでみましたが、、、まず、種火がなかなか点きません。煙ば  
かりが目にしみて点きません。ようやく点いたら、3カ所の火をそれぞれ消えないように木をくべ  
て保つのに目配りを続けなければなりません。火加減の調整も大変です。近くで見ていると楽そ  
うに見えますが、大変な作業だとわかります。11時30分までに煮込みを終わらせなければなりません。  
はんた どうよう しょう ご飯炊きも同様に4升のコメを4～5釜分炊きます。火加減、水加減も大切に配膳までに炊き  
あ 上げるのには経験がいります。火を起こす人、野菜等を準備する人、ご飯を炊く人、かたづけをする  
ひと あじつ ひと ぜんたい しじ ひと れんけい たいせつ さぎょう つづ 人、味付けをする人、全体を指示する人など連携が大切な作業が続きます。……続く



## お知らせ

ねんどはるじんじいどう づけ ◎2026年度春人事異動(4/19付) チェ ジュヨンシンぶさま たまつくりきょうかいきょうりよく  
崔 周永神父様 (玉造教会協力へ)  
たかやま あきらしんぶさま きょうどう  
高山 徹神父様 (かわちB共同へ)

れいわ ねんど がつ よくとし がつ げつていけんきんぶくろ こじん はいふ しんねんど  
◎令和8年度(4月～翌年3月)「月定献金袋」を個人ボックスに配布しますので、新年度も  
きょうりよく ねが はいふ しつもん れんらく  
ご協力よろしくお願ひします。配布がなかったり、質問などありましたらご連絡ください。  
ざいむいんかい  
(財務委員会)

や おきょうかいしょうきょうくひょうぎかいきやくかいせいあん きょうくちょう にんか  
◎八尾教会小教区評議会規約改正案が教区長より認可されました。(2026年3月19日付)  
けいじ らん  
エントランスに掲示していますので、ご覧ください。

時々、訊かれたりする。音楽家ですか、と。  
最初はただ顔が似ている音楽家がいるかもなと思ったけど、今まで、結構の頻度のその質問に、ふと我ながらなるほどと思った。音楽家というのが調和の取れた音を出すために、鍛え上げていく者だとすると、似たところがないわけでもない。イエス様が仰ったように、人間は自分の内側から表れるもので、内面の様子が、その波長が、その周波数が他人にそのまま伝わっていく。聴き苦しいものを出す人もいれば、どんどん聴きぼれになるものを繰り出す人もいる。

人間はある種の楽器である。きちっと調律を終え、腕の良い演奏者に弾かれる楽器こそ、本領が発揮できるわけだが、反対に調律もいまいちのうえ、適当に自分勝手に鳴らす弾き手の中の楽器、其処からの音は実に騒音になってしまうだろう。人間も然りだ。落ち着きのない内面からは混沌とした曖昧な音が流れて来て、周りをざわつかせるのだ。という、楽器に喩えられる人間、その落ち着き、あるいは内面の平和は何処から来るのだろうか。

言うまでもなく神様からだ。しっかりと独りで自分の内面を見つめなければ、神様に会える事はほぼ不可能とも言えよう。真の自分は砂漠にて会うことが出来る。砂漠は何なのか。何処にも逃げる場所がなく、落ちに落ちた、絶望のどん底が其処なのだ。

人間はまだ大丈夫だと思い込んでいる内は、神様の方に本気で近付こうとはしない。八方塞がりになり、死にそうになった時じゃなければ、人間は項を固くするばかりなのだ。

モーセの、ユダヤ人を行かせてくれという神様の伝言を頑なに拒んでいたパラオは、決して珍しい存在ではない。そういった阿保のような頑固さを、人間は持っているのだ。

しかし、どん底に陥り、其処から這い上がるしかない人間は神様を切に呼び求める。救いを希うわけだ。人間はどれ程威張っても、実にちっぽけだ。「人間は栄華のうちにとどまることはできない。屠られる獣に等しい。」(詩編49.13)

お世話になっていた、八尾教会の司祭室を片づけている。初聖体準備の子供学校の際、作った折り紙や心の籠ったメモなどの思い出の物は持っていくつもりだが、時間が経てば、それも片づける時点がまた来るだろう。

永遠に、色褪せず、残るのは神様の前に本気で祈ったことに、神様の中で分かち合えた「愛」それだけ。

それが残り、人間は去っては消えていく。

幸せではないか。

神様の元に戻っていくのだから。

